

(PDF 版・6の2のア)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／3 聖書』「二十一節 教会における自由——— 言葉の自由」

(文責・豊田忠義)

「二十一節 教会における自由——— 言葉の自由」 (420-461 頁)

「一 言葉の自由」

(1) 「聖書」は、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由」とによって賦与され装備された「直接的な、絶対的な、内容的な権威と自由を持っている」。したがって、啓示の主観的可能性として客観的に存在している、それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」——すなわち、「神の言葉の三形態」(換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性)の関係と構造(秩序性)における「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「**神の言葉の自由**」は、**それ故に**その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」において現存している「**聖書の自由**」は、「**先ず第一に単純に……聖書**」が、その聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準・基準とした第三の形態の神の言葉である「**教会の生……この世の生の中での、すべてのそのほかの要因や要素に相対して、イエス・キリストにあつての神の啓示についての<直接の証言>として、<取り除くことのできない特性と独一無比性を持った主題を持っている>**ということから成り立っている」。

「人は、ここで、直ちにマタイ一六・一六——一九における、ペテロのメシア……告白……と共にすべての聖書的証言の初めと終わりについて考えなければならない……」。

『人々は人の子(あるいはわたし)は誰であると言っているか』(マタイ一六・一三)と聞かれ、ペテロ(教会の信仰告白)は『あなたは生ける神の子キリストです』と答えたところのこの『人の子』語句についてバルトは、『メシヤの名』に対する『人の子』というイエスの自己称号は、「(覆いをとるのではなくて)覆い隠す働きをする要素〔神の隠蔽性の要素〕として理解する方がよい」と述べている。それに対して、「逆に使徒行伝一〇・三六でケリグマが直ちに、すべての者の主なるイエス・キリストという主張で始められている時、それはメシヤの秘義を解き明かしつつ述べている〔神の顕現性〕というように理解した方がよい」と述べている。言い換えれば、その内在的本質である神性の受肉ではなくその外在的な第二の存在の仕方における言葉の「受肉」——すなわち「神が人間となる」・「僕の姿」・「自分を空しくすること、受難、卑下」は、その内在的本質である「神性の放棄や神性の減少を意味するのではなく」、「神の姿の隠蔽、覆い隠しを意味している」。イエス・キリストは、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神で

ある」まことの神にしてまことの人間である。「あなたは生ける神の子キリストです」という信仰告白の根拠・源泉は、「神に敵対し神に服従しない」、生来的な自然的な「そのままでは神に接するための器官も能力も持っていない」その現にあるがままの現実的な人間存在における個体自己としての全人間の「血肉にはない」。したがって、「あなたは生ける神の子キリストです」という「ペテロの信仰告白」の根拠・源泉は、「ペテロの血肉ではない」。「**彼が**〔「あなたは生ける神の子キリストです」と〕**告白する認識**」は、すなわち信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事は、「**直接的な啓示を通して**〔直接的な子としてのイエス・キリスト自身、語り手の言葉を通して〕、**天にいますイエスの父を通して**〔天にいますイエス・キリストの父、啓示者、言葉の語り手を通して〕、〔すなわち、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での神のその都度の自由な神の恵みの神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」（「存在的な必然性」）と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高挙されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」、神的愛に基づく父（啓示者）と子（啓示）の交わりとしての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（「認識的な必然性」）に基づいて、終末論的限界の下で〕、**彼に与えられたがゆえに、彼はさいわいと言われている……**」。そして、「この理由から、彼は今また直ちに『この岩の上にわたしの教会を建てよう』という約束を受け取る」。「よく理解せよ」——この「**すべての直接的な**〔最初の第一の〕**聖書的啓示証人の立場と機能を代表する特性と独一无二性の中で使徒ペテロ**」は、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に存在している聖書的啓示証人として、「一方において〔「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕**イエス・キリストと、他方において**〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教会とを〈仲介する主体〉となるのである**」。あくまでもこういう仕方で、「使徒ペテロは、自主独立性と自分自身の機能……を持つようになる」。このところで、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動という「重要な要素が姿を現しているかに……よく注意せよ」、先ず以て「神の啓示が客観的に存在」し、その次に「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという〈方式〉の下で、その現にあるがままの現実的な人間存在における「具体的人間が客観的に存在」し、その「彼が啓示に奉仕するように任命されること、この奉仕の中で果たされる彼の機能」——「この順序によく注意せよ」、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に存在している「聖書的啓示証人である人間の任命と機能が、第一のもの、神の啓示に関連させられ、依存させられているかによく注意せよ」。

さて、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に

存在している「聖書の啓示証人である人間の任命と機能」は、「人間によって立てられたのではなく（ガラテヤ一・一）、……また彼自身で使徒と呼ばれる値打ちがあったわけでもない」。「パウロも、神の恵みによって……今日あるを得ている（Ⅰコリント一五・一〇）。また、イエス・キリストご自身が彼をそのような者にされたのであり、それはイエス・キリストを死人の中から甦らせた神（ガラテヤ一・一）、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、み子を彼の内に啓示することがそのみ心に適ったがゆえに、……パウロを母の胎内にある時から聖別された（ガラテヤ一・一五—一六）そのおなじ方によってである。彼にとってはあくまでこの恵みで十分なのである（Ⅱコリント一・九）。……パウロのうちに生きておられる方（ガラテヤ二・二〇）、パウロを強くして下さる方（ピリピ四・一三）はキリストである」、「まさに恵み、まさに〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕キリストこそが、同時に〔第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に存在している〕彼の使徒職の内容である」。言い換えれば、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストによって直接的に唯一回的特別に召され任命された特性と独一無比性を持っている預言者および使徒たちの、その最初の直接的な第一の「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、「啓示ないし和解」の「概念の实在」——この「イエス・キリストにあつての神の啓示という主題を通して〔第二の形態の神の言葉である〕使徒は、またそのようにして、……〔第二の形態の神の言葉である〕聖書全体は、ほかのものとは違った、ほかのものに対置された、特有な主体として成り立たせられている」。「神の自由を認識するということは、……神の啓示を通して造り出された……われわれに出会う〔第二の形態の神の言葉である「啓示との「間接的〈同一性〉」において現存している「聖書の自由」、〕聖書の啓示証人〔の自由〕を認識することである」。したがって、「神の自由を認識するということ」、それ故に「聖書の、聖書の啓示証人の自由を認識するということ」は、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における成員にとっては、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・基準・標準として、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それに対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」（通俗的な意味での「隣人愛」ではなくて、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、教会自身や世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目

指して行くという点にあるのである。このように、それは、「今やまさに……人間的な本質を認識することを意味している」。

(2)「包括的に……洞察すれば、自由とは、能力、力である」。ここで、「神の言葉の力」とは、一方で、聖書もその人間的性質からして、人間的な「ほかの書物と原則的に共通に持っている宗教的、祭儀的、道徳的、審美的、神学的なもろもろの靈力〔人間的な「魅力、魅了する力」〕……のことが理解されてはならない」。「旧約聖書および新約聖書の中には、聖書的思惟と聖書的言語、聖書的觀照と議論の魅力〔人間的な「靈力」〕……が存在する」、ちょうど前回の記事で書いたのであるが言葉の専門家の太宰治が『正義と微笑』で述べていたように、また言葉と思想の専門家の吉本隆明が『<非知>へ——<信>の構造 対話編「吉本× 末次 滝沢克己をめぐって」』で述べていたように。しかし、それらは、「人間的な形態の中での神の言葉から切り放すことはできないものである」が、それらは、「神の言葉の力、神の言葉の自由ではない……」。他方で、「神の言葉の力、自由」は、それ自身が出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の「神の言葉の力、神の言葉の自由のことである」。それは、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>の中での客観的な「存在的なラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）の現存にある、「キリスト教に固有な」類と歴史性の現存にある。すなわち、それは、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由」とによって賦与され装備された「権威と自由を持つところの聖書」におけるそれである、教会の宣教の思惟と語りと行動の原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準・基準としての「教会に宣教を義務づけている」第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」において客観的に存在している聖書におけるそれである。

そのような訳で、「主題の力」が——すなわち、「イエス・キリストにあつての神の啓示の力」が、〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動〕、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて「認識されるところで」、「初めて認識されるし」、「さらにそこで、初めて……聖書の靈力と魅力も正しく評価される」。したがって、第二の形態の神の言葉である「聖書の啓示証人の主題」である「イエス・キリストにあつての神の啓示が持っている力強さ全体は、……人の心を励

まし鼓舞する力、威厳、深さがあるし、そこにはまことに『霊』がある」。バルトは、『証人としてのキリスト者』で、結局は必然的に最後の離脱した革命の過渡的課題と究極的課題とを明確に提起でき得ていない水準にあった全く人間的な宗教的社会主义における「そこでの人間の困窮と人間に対する助けとが、聖書が理解しているほどには、真剣に理解されておらず、深く理解されていなかった」と述べている。「聖書の啓示証人のその力強さ全体は、『わたし〔イエス・キリストの名〕から離れては、あなたは何一つできない』という法則の下に立っている」。したがって、それは、「人間的な力強さではない」。すなわち、それは、「神から来ているそれである」。それは、「神はわたしたちに力を与え、新しい契約に仕える者とされた（Ⅱコリント三・五以下）という〔聖書の啓示証人、使徒〕パウロの自己認識（≪・自己理解・自己規定≫）の下に立っている」。ここで、「神の言葉」は、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の「自分自身が根源である父の永遠の言葉として持っている力が問題ではなくて」、「父が子として自分自身を区別した」ところの「肉となった神の言葉〔その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉における神の言葉〕、具体的には、人間によって信じられ・証しされた神の言葉、神の言葉の力が問題である〔イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命された預言者および使徒たちのその人間性と共に神性を賦与され装備された「イエス・キリストについての「言葉、証言、宣教、説教」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において客観的に存在している聖書における神の言葉、聖書における神の言葉の力が問題である〕」。その「神の言葉」は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「その尊厳さ〔聖性〕を隠したところの卑下の中での神の言葉〔その第二の存在の仕方における言葉の受肉における神の言葉〕」、それ故にそれは、「この世の中でのそれであるから、そこでは自分と並んで、自分に逆らう力〔全く人間的な世の力、自然的な信仰・神学・教会の宣教における全く人間的な教會的力〕が存在しており」、それ故に「そこでは時間〔人間の個の時間性、現存性、個体史・自己史および人間の類の時間性、人類史、歴史、世界史〕の終わりまでこれらほかの力との対決と戦いの中にある……神の言葉が問題である」。

イエス・キリストにおいて自己啓示された神であるキリストにあつての神は、自己自身である神としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かつて」の外在的なその「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の受肉において、「神のみ子の中で人間となり、したがって自ら被造物〔「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」、すなわち「イエス・キリストの＜名＞」〕となり給い、今や、この神のみ子がわれわれの實在の世界と現実存在の場で、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言

葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に存在している] その証人たちと彼らの証言という形態〔聖書、神の言葉の第二の形態〕の中で、〔啓示の主観的可能性として客観的に存在している、それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」——「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）の中において〕引き続いて生き給う。したがって、この聖書的啓示証言の中で働く神の力は、その場所のただ中で働く具体的な、慰め癒すところの、しかしまた〔同時に、「人間の現実存在全体を、最も隠れた現実存在をも批判にさらし」〕裁き、攻撃するところの力である（エレミヤ二三・二八以下……ヘブル四・一二以下）。「われわれの時間は〔われわれ人間の個の時間性、現存性、個体史・自己史および人間の類の時間性、人類史、歴史、世界史は〕、啓示の時間ではない。「われわれのための神の時間である」「啓示の時間」は、「常に」、「われわれ人間の時間」の「外」・「彼岸」にある、あり続ける。「われわれの時間は、その初めと終わりによって、換言すればイエス・キリストの昇天と再臨〔復活されたキリストの再臨、終末、「完成」〕からして、その啓示の時間によって、したがって〔「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の〕神の言葉の完結した勝利によって、したがってすべてのそのほかの力が既に片づけられたことによって、めぐり囲まれている時間である。したがって、キリスト復活から復活されたキリストの再臨（終末、「完成」）までの聖霊の時代に生きるわれわれは、終末論的信仰を生きるのである。「新約聖書によれば、神の恵みの賜物である聖霊を受け、満たされた人」は、「召されていること、和解されていること、義とされ、聖とされ、救われていることについて語る時」、「すでに」と「いまだ」において「終末論的に語る」。ここで、「終末論的」とは、「われわれの経験と感性」（われわれ人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍）にとつての〈いまだ〉であり、神の側の真実としてある、それ故に「成就と執行、永遠的實在として」、〈すでに〉ということである。「この世における自由と力を持つ主体」は、「失われた、非本来的な、敗北的なそれとして、否定的判決を言い渡されたそれであるから、それらは、原則的に問題化されなければならない」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会自身も含めて「われわれの世と現実存在」は、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「勝利の光の証言を持っているがゆえに……勝利の光に照らされて立っている」。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会自身も含めて「われわれの世と現実存在が、それ自身で、勝利の光の担い手であるなどということはない。すなわち、「この勝利の光の担い手は……全くただイエス・キリストご自身だけである」。このような訳で、「この勝利についての、……神の啓示についての、証言の力は〔すなわち、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書的啓示証言の力は〕、現に、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会

自身も含めて] われわれの世と現実存在の領域のそのほかの [「神の言葉に敵対する」 われわれ人間的な] 主体の力……との対決と戦いの中に立っている」。

「人は、[「新約聖書において絶対的な主張の仕方

で宣べ伝えられている」、三位相互内在性」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われぬ差異性」の中での第二の存在の仕方、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間] イエス・キリストの中で既に啓示され、また将来も [「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、聖書を媒介・反復するという仕方] 啓示されるであろう、……神の力の勝利」が、「この世の相対性のただ中において、世の力が現実

に存在していることを絶えず意識しつつ、またそれらの力の危険性を十分意識しつつ宣べ伝えられているということ

を認識する時初めて」、「その神の力の勝利を理解することができる」。したがって、「イエス・キリストの中で、イエス・キリストを通して実現されたのではない」ところの、人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「神秘主義という絶対性」の後光をかぶせた「神の言葉の現実存在は……この世界の中で、ただ静寂主義としてしか存在するはできない」。このような訳で、「神の言葉は、[徹頭徹尾神の側の真実としてのみある] その内容、神的啓示に関しては完成されているが、[人間の] 時間の中での人間によってほかの人間に対して伝えられる言葉の力としてのその力に関しては、……完成されていない」。イエス・キリスト自身であるところの、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉」が、具体的にはその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している「聖書」が、「この世と現実存在の場所の中で事実問題化されているということは確かなことであり、またその攻撃された姿を垣間見ること

も確かなことである」が、「神の言葉の自由」は、「この世の原理全体に対して [「この世の原理全体に対して、神の言葉が隠されているということに、人はよく注意せよ」]」、「聖書の内容において、質的に決定的な優位性に立っている」。「ここでは、ちょうどイエス・キリストご自身の受難と死において起こったのと同様に、神の計画と意志が働いている」。したがって、「イエス・キリストご自身が、その弟子は人に与えることができる金銀を持っていないというふう

に定め給うたのである(使徒行伝三・六。なおマタイ一〇・九をも参照)」、「わたしがあなたがたを遣わすのは[わたしが、あなたがたを、起源的な第一の形態の神の言葉を、具体的には第二の形態の神の言葉である聖書における神の言葉を攻撃し、それに反駁するこの世の主体や力、原理全体のただ中に遣わすのは]、羊をおおかみの中に送るようなものである(マタイ一〇・一六)」、「弟子[第二の形態の神の言葉である預言者および使徒たち]はその師[起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身]以上の者ではなく、僕はその主人以上の者ではない(マタイ一〇・二四)」、「また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくな

い（マタイ一〇・三八）。

「全き真理はこうである」——『世の原理全体』は、聖書の中では、既に見すかされ、括弧の中に入れられており、「聖書の内容、その勝利において、凌駕され、負かされている」。何故ならば、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである。……（Iコリント一・二五以下）」、「それであるから、『もしあなたがたのうちに、自分がこの世の知者だと思ふ人〔「愚か者」〕がいるなら、その人は知者になるために愚かになるがよい（Iコリント三・一八以下）』。「全き真理は第七の御使がラッパを吹き鳴らした時、天上で起こった『大きな声』が語ったことである。『この世の国は、われわれの主とそのキリストの国となった。主は世々限りなく支配なさるであろう』（黙示録一一・一五）」——「この全き、隠れた真理の認識こそ、神の言葉の自由の認識である」。したがって、この「神の言葉の自由の認識」は、神のその都度の自由な恵みの神的決断による、その「死と復活の出来事」、すなわち客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づく「イエス・キリストの甦えりを信じる信仰の中でしか遂行できない」。起源定な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストが、われわれ人間に対して、第二の形態の神の言葉である聖書およびその聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である教会の宣教を通して「同時的となる時と所、『神われらと共に』が神ご自身によってわれわれに語られるところにおいては」、「われわれは神の支配のもとに入ることを承認し確認する」、それ故にわれわれは、「世、歴史、社会を、その中でキリストが生まれ、死に、甦られたところの世、歴史、社会として承認し確認する」、「自然の光の中でではなく、恵みの光の中で、それ自身で閉じられ、かくまわれた世俗性は存在せず、ただ神の言葉、福音、神の要求、判定〔裁き〕、祝福によって問いに付され、ただ暫時的にだけ、ただ限界の中でだけ、それ自身の法則性とそれ自身の神々に委ねられた世俗性があるだけであることを承認し確認する」。したがって、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書は、世と比べてはるかに力強いということを確認することなしに、人はイエス・キリストの甦えりを信じることはできない」。したがってまた、第三の形態の神言葉である教会（すべての成員）は、「この信仰と認識の中で、……生きる」。「教会はそのことをただ、……〈甦えられた〉イエス・キリストは、かつてポンテオ・ピラトノモトで、このわれわれの世にあって苦しみを受け、十字架につけられ、葬られ給うた方であるという啓示……の法則のもとでなすことができる」。したがって、イエス・キリストにおける十字架の死と復活の出来事は、その全体性の中で信仰され認識されなければなら

ない。したがってまた、自由の精神を原理とする西欧近代を頂点とするヘーゲルの歴史哲学と「律法・父の国・奴隷の状態」→「恩寵・子の国・神の子供の状態」→「自由・霊の国・神の友の状態」という救済史的な神学とを混合させて神学的な三段階的進歩史観を提唱したモルトマン、その十字架の死の側面だけを抽象し拡大鏡にかけて全体化し、革命の過渡的課題と究極的課題を明確に提起しないところで結局は啓蒙主義的な外部注入論的なある特定の民衆、人種や民族と神学を混合させた解放の神学（土俗的神学と言えるものである）、人類史のアジア的段階における日本的なナショナルなもの（滅私奉公）と十字架の死とを混合させた北森嘉蔵が提唱した『神の痛みの神学』（土俗的神学と言えるものである）は、まさに「何らかの抽象を以て始められ何らかの空論に終わるところの」「すべての大学社会の神学」（『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』）そのものである。このような訳で、第三の形態の神の言葉である「教会は、神の言葉の自由」が、それ故に「神の言葉の優越性が問題であることを知り、…あの隠れた王国の真理を、決して教会としての自分自身の実在の中で尋ね求めるとか、見出したと思わない時に、この信仰とこの認識の中で実際に生きるであろう」、換言すれば第三の形態の神の言葉である教会が、啓示の主観的可能性として客観的に存在している、それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」——すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動にける原理・規準・標準として、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」（通俗的な意味での「隣人愛」ではなくて、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、教会自身とこの世に向かっての純粋な教えとしてのキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指す時に、教会（すべての成員）は、「この信仰とこの認識の中で実際に生きるであろう」。

『神の国』で、〈非〉自然神学の段階の水準にある思惟と語りにおいて、神は「時間ノ創造者マタ決定者と呼んでいる」（まさに「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「時間の主の時間」である「イエス・キリストにける啓示の時間」、「実在の成就された時間」は、「まことの現在である」）が、『告白』では、自然神学の段階の水準にある思惟と語りにおいて、時間は、「過去、現在、未来は精神の中にあつて〔人間の個の時間性、現存性、個体史、自己史の中にあるのであつて〕、ほかのどこにあるのでもない」と述べている自然神学と〈非〉自然神学とが混在している

「アウグスティヌス」は、「地上ノ国と神ノ国を対置させた」が、その時、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという〈方式〉を堅持しなかったその分、「神の言葉の優位性を、〔人間的な〕特定の世界観と政治的要素やその論拠としてしまった」。したがって、「アウグスティヌスの模範的な、標準的な、雄大な構想であるキリスト教的歴史観」は、すなわち「勝利に輝く神ノ国」は、「結局は、苦しみつつ戦う、勝利にみちたカトリック教会と同一視され」、「その神ノ国は、そのほかの人間的な党派〔党派的思想、党派的共同性〕に対しての……人間的な党派の事柄の栄光になってしまった」。アウグスティヌスは、「神ノ国が、常に、地上ノ国の、彼岸・外にある」という認識と自覚を欠如させていた、全く人間的な「教職者性と世俗性から解放されていなかった」。復活に包括された「イエス・キリストの十字架が、アウグスティヌス的概念には欠けている。すなわち、アウグスティヌスが、神ノ国を勝利にみちた〔全く人間的な〕カトリック教会〔人間的構成物〕と同一視した時」、「彼は、その神ノ国〔全く人間的な教会という人間的構成物〕は、聖書によって否定的判決を言い渡されたそれである」ということについての認識と自覚を欠如させていた。「それだからこそ、アウグスティヌス概念には実際の、神的信頼性が欠けるのである」。したがって、「信じるに値する仕方で宣べ伝えられるべき地上における神ノ国は、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の統治ではなく、……この世にあって十字架につけられなければならない方の統治であり〔すなわち、「三位相互内在性」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われぬ差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストの統治であり〕、その延長線上にある聖書の統治〔イエス・キリスト自身を起源とする、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書の統治〕、およびこの統治が〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕服従を見出すところの信仰である」。したがって、この「信仰」（啓示認識・啓示信仰）は、現存する全く人間的な「教会という人間的構成物が、常に、危険にさらされており、いつ何時破壊されるかも知れず、ちょうどイスラエルの神殿の場合と同じように結局最後に破壊されなければならないものであることが確実である限り」、「キリストのからだは、その栄光に入るためには、死ななければならない、葬られなければならないことが確実である限り」、「事情はどうしてもそのようではかないということ……を考慮に入れるであろう」。したがってまた、現存する全く人間的な「教会という人間的構成物」としての教会は、「神の言葉の自由と優位性の隠れた真理を認識し」、「信じるということ……にあくまで踏み止まらなければならないのである」。このような訳で、「そのようなものと

して、(決してそれ以外の仕方ではなく)、その「神の言葉の自由と優位性の隠れた真理」は、「教会の慰めであり、教会の生の汲みつくすことのできない源泉である」。

イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での「存在的なラチオ性」——すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)における第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書における「イエス・キリストについての証言を通し、世に対して通告される戦い〔否定的判決〕が行われることとなる限り、常に繰り返し人間的な敗北の姿、人間的な罪深さと無益な姿、人間的な苦しみと死ぬという形の中で知られるようになること……が啓示の秩序に対応したことであり」、それ故に「その証言は確かに現実の宣戦布告となるのである」。「地上に平和をもたらすために、わたしが来たと思うな。平和ではなく、剣を投げ込むために来たのである(マタイ一〇・三四)」、「わたしは、火を地上に投じるために来たのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう(ルカー二・四九以下)」、「十字架という限界が、地上に火を投じることについて語られる際に、……熟慮され、関連づけられている」。このような訳で、復活に包括された「十字架という限界は、静寂主義の口実となることはできない……」。現存した、現存する、全く人間的な教会自身を含めてその現にあるがままの現実的な人間存在における世界は、「〔啓示ないし和解の實在〕そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストおよび〔そのイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である聖書における〕イエス・キリストについての証言を通して、攻撃されているのである〔否定的判決を言い渡されているのである〕」。このことは、イエス・キリストにおけるその死と復活の出来事の全体性から言って、全く人間的な教会自身を含めて「現実の世は、……それ自身において暗く、それ故キリストの十字架の舞台であるが、しかし同時にそれはまたキリストの甦えりの光〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」である「キリスト復活四〇日の福音」、「實在の成就された時間」の光〕の中で照らし出されている」ということを意味している。神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で与えられる「イエス・キリストの甦えりを信じる信仰は、まさに終末論的な信仰として、換言すれば、イエス・キリストの中にわれわれの時間とその内容の始まりと終わりを見て取る信仰として、全く具体的な内容……を持つ……」。「創造は、契約の外的根拠として、イエス・キリストが始原であり中心であり終極である恵みの契約の歴史のための場所設定である」、「恵みの契約の歴史は、創造の内的根拠として、創造の目標である契約の歴史

の始原であり中心であり終極であるイエス・キリストご自身である」。

起源的な第一の形態の「神の言葉」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書）は、「啓示自身を持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉において、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動において、「世のただ中であって……世にあってさらされている……直接のおよび間接的な攻撃に対して自分自身を主張して行く力を持っている」、「自分が自由であり、立ちまわっていることを実証する」。その証左は、客観的な「存在的な必然性」（客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」）と主観的な「認識的な必然性」（「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」）を前提条件とした主観的な「認識的なラチオ性」（徹頭徹尾聖霊と同一ではないが、聖霊によって更新された人間の理性性）を包括した客観的な「存在的なラチオ性」——すなわちそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）の現存である。その「神の言葉に対してさまざまに違った、……〔全く人間的な〕政治的および精神的王国が、（それらは……例外なしに皆何らかの程度において、反キリスト的性格を持っている……）立ち、また倒れる。〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会そのものは、……今日忠実であるかと思えば明日は不実であり……といった始末である」。このように、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書は、〔教会自身と世としての全世界における〕その敵たちによって拒否され、その友人たちによって否定され、裏切られるのであるが、聖書は自分自身に忠実である」から、第二の形態の「神の言葉としての聖書を否定し裏切る教会を含めてすべての側に向かって、あらゆる状況の中で、繰り返し同じひとつのこと——神はそのひとり子を賜うほどに世を愛されたという使信——を伝えることをやめないのである」。「聖書は、今日その声がかき消されてしまっても、明日は再びはっきりとした声で語るようになるだろうし、ここで誤解され、ゆがめられるとしても、あそこで新たに自分の本来の意味を正しく証しするであろう。歴史のこの場所的、時間的領域で、すべての地盤、すべての人間、すべての形態を失うように見えても、全く別の領域で聖書はそれらすべてを新しく造り出すのである。ソレデアルカラ主の約束はまことであり、聖書の預言者と使徒たちに語られ、彼らの方でも語らなければならないことの力によって、約束は預言者と使徒たちの現実存在の中で成就したのである」。「神の言葉を除去することができるであろう力は全く考えられない……」、「そういう力は、世に存在しない」。何故ならば、「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう（ルカ一九・四〇）」からである。ここで、「石が叫ぶ」とは、自然神学の段階で停滞と循環を繰り返した大学神学者・パンネンベルクが言うところ

ころの、自然そのものである「石さえも語るのであるから」、生来的な自然的な自己意識・理性・思惟を持った「人間が神について語るというのはまったく自明のことである」という意味で使われていない。したがって、それは、徹頭徹尾神の側の真実としてある、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、まさにそのイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」について言われている、まさに<非>自然神学の段階におけるその自己証明能力の<総体的構造>について言われている、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動について言われている。

起源的な第一の形態の「神の言葉」(具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書)は、「自分に対して世から……附着してくる要素を繰り返し遠ざけ、分離し、排除する力を持っていることにおいて、自分が自由であり、立ちまされたものであることを実証する」。「世にあっての神の言葉の歴史」は、「正面きって戦いをしかかけられ、拒否される歴史だけでなく」、「預言者および使徒の言葉としてのその人間性の側面において、ちょうど預言者および使徒たち自身が誤謬から機械的に守られていなかったように、もっと質の悪い危険に対して、「わがまま勝手に」恣意的独断的に]解釈し曲げられ、それとともに人間的な危険に対して」、それ故に「神の言葉にとって異質な〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された〕理念の力という偽物を混ぜ合わせて贗造される危険に対して絶対的に保証されているわけではない歴史も持っている」。「啓示は、例証されようとせず」、それぞれの時代、それぞれの世紀において、その時代と現実とに強いられた第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会が、「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とする「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すところで「解釈されることを欲している〔この時、「解釈するとは、別の言葉で同一のことを言うことである」〕にも拘らず、「教会の歴史」は、「神の言葉の解釈の歴史であると同時に」、「常に新たに脅かしてくる神の言葉をこじつけて解釈しようとした勝手読みの歴史である〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間の意味的世界・物語世界・神話世界の記述の歴史である〕」。しかし、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉は、自己証明能力と出来事の自己運動を持っており「自分自身に忠実である」から、教会の歴史は、「それよりもはるかに、〔第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している〕聖書が持つ批判の力

によってすべての注釈者に対して、繰り返し聖書自ら立ち向かって行ったし、繰り返し立ち向かって行くであろう歴史である」。その証左が、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）の現存である。第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書は、プロテスタントの正統主義者たちが好んで語ったように、自分自身ヲ解釈スル能力を持っているのであり〔何故ならば、イエス・キリストにおける啓示自身が「啓示に固有な自己証明能力」を持っているからである、起源的な第一の形態の神の言葉自身が出来事の自己運動を持っているからである〕、その能力は……間違って自分に押しつけ加えられた意味を遅かれ早かれ自分の力で取り除き、自分にとって疎遠なものとして……正体を暴露し、……自分自身を表現していくということから成り立っている」。

起源的な第一の形態の「神の言葉」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書）は、「抵抗し、批判する力を超えて、自分と出会う疎遠な要素を、結局同化し・役立たしめることができる〔包括し止揚し克服することができる〕ということにおいて、自分が自由であり、立ちまされたものであることを実証する」。「神の一回的な啓示〔起源的な第一の形態としてのイエス・キリスト自身〕についての証言としての聖書〔第二の形態の神の言葉「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書〕が、「罪深い世のただ中において、疎遠な要素として対決しなければならないすべての歴史的な要素」は、「おおっぴらの敵対者かひそかな誘惑者である」。しかし、その「神の言葉」は、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動において、「全くさまざまな状況や運動を実り豊かなもの、有用なものにし、さまざまな民族と人間的個人を自分のものとすることができる」。その時には、「世の疎遠な要素としてのそのもともとの性質が先ず取り去られなければならないということ」について、「新しい性質を持つために、新たに造り出されなければならないということ」について、「人はよく注意せよ」、ちょうど常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意ができていくところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（あくまでも神の側の真実としてある、神の側からする神の人間との架橋）であり、神との間の「平和」（ローマ五・一）であり、それ故に神の認識可能性である「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かつての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕に向かつての人間の用意が存在する」ように、常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意という「人間の局面は、全くただキリスト論的局面だけ

である」ように。このような訳で、「人間的なもともとそれらに固有な本質が問題なのではなく」、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「それらの身に及ぶ〈選び〉が、それらに出会う〈恵み〉……が問題である」。この「〈選び〉……〈恵み〉」が、「この世にあつての神の言葉の歴史である」、「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）である。このような訳で、「神の言葉の歴史は、ただ単に戦いの歴史であるばかりでなく、また選びと恵みの歴史である」。この時、「これら世の要素の身に起こることは、決して〔人間の、人間的なものの〕神化ということではない」。「これら世の要素の身に起こることは、聖書の人間的言葉およびイエス・キリストの人間性が持っているしるしとしての性質が伝達されること、その特有の機能の中へと編み入れられること、それと共に神の言葉の歴史的な形態の活動が拡大され、個別化され、豊かに〔豊富化〕され、拡充されることである」。すなわち「キリスト教に固有な」類の「拡大」・「拡充」、豊富化、その時間累積ということである。その時、「神の言葉」が、「そのもろもろのしるしの内のどれか一つのしるしと同一となること、世の要素に変えられてしまうことは決してないのである」。何故ならば、「神の家に対する祝福と聖別があるのと同様、神の家に対する裁きがある」からである。「神の言葉の自由」は、「ただ単に突き放す自由であるばかりでなく、また引き寄せ、取り上げる自由であり、……ただ単に批判的な性格を持つだけではなく、また約束に満ちた、和解させる性格も持っている」。「神の言葉の自由」は、その全体性において認識され理解されなければならない。

最後に、起源的な第一の形態の「神の言葉」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書）は、それぞれの時代、それぞれの世紀において、「自分自身の形態を、それと共に世に対するその働きの成果を変えることができるということにおいて、自分が自由であり、立ちまされたものであることを実証する」。言い換えれば、「神の言葉」は、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「きょうも、きのうも、いつまでも変わることがない」ところの「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）における断続性と連続性という段階を持っている。この「神の支配の生きた道具」としての「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）は、一方で、それぞれの時代、それぞれの世紀、それぞれの世代における、その資質や時代や現実に強いられた個性や時代性を持っていると同時に、他方で、それぞれの時代、それぞれの世紀、それぞれの世代においても、「決定的な類似性や共通性の中心を持っている」。「神が生きておられることが確かである限り、永遠から永遠にわたって生き給い、それ故にこそまた、ご自分がかつて〔第二の形態の神の言葉である〕預言者および使徒たちに啓示され、ご自分を証しする言葉がかつて彼らの口に授けられた〔かつて預言者および使徒たちに、その最初の直接的な第

一の「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」を受けられ]、われわれの時間的な世の主として生き給うことが確かである限り]、「神は、この『かつて』の中に……埋葬されており給わない」、すなわち「これらの人間の書いた書物の中に……埋葬されており給わない」。「一方において、〔第二の形態の神の言葉である〕旧約聖書および新約聖書がただ神の言葉としてだけ、……イエス・キリストの証言としてだけ理解されることができるということがまことであり、他方において、〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストは〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会および〔全く人間的な〕世の生ける主であり給うことがまことであるならば、その時、預言者および使徒たちの人間的な言葉の中での神の言葉の形態」——すなわち、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）におけるその第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している「**聖書は、神の言葉の墓場ではなく、……神の霊の生けるみ手によって動かされた、その限り**それ自身**生きた……**神の支配の道具**である**」。このような訳で、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「聖書の内容を念頭に置くならば」、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によってその人間性と共に神性を賦与され装備された第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している「聖書は、生きた存在、……その探究に当たってわれわれは常にまた、新しい要素が、……昨日、および一昨日には、（この存在そのものによって、まだ明るみに出されなかったがゆえに）最も良心的な研究といえども近づき得なかった要素が、われわれに出会うかもしれないことを考慮に入れていなければならない永遠に生きた存在……である」——「パウロはその時代の子としてその時代の人々に語った。けれどもこの事実よりはるかに重要な事柄は、いま一つの事実、すなわち彼は神の国の預言者ならびに使徒としてあらゆる時代のあらゆる人々に語っている、ということである。（中略）聖書の精神は永遠の精神なのである。かつての重大問題は今日もなお重大問題であり、今日の重大問題で単なる偶然や気まぐれでない事柄は、またかつての重大問題と直結している」（『ローマ書』「第1版序言」）。また、「聖書の形式を念頭に置くならば」、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によってその人間性と共に神性を賦与され装備された第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している「当時の預言者および使徒たちの言葉としての聖書の一回性」は、換言すれば聖書の「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における断続性と連続性という段階的一回性は、「聖書が、自分自身と同一であり続けながら、しかも自分の形態を、それと共にまた自分が及ぼす影響と成果を変え、新たにし、さまざまな時代と人間に対してその都度、全く新しい側面から、全く新しい次元において、全く新しい容貌をもって、自分自身を表示する」という点にある。したがって、「**われわれが聖書の探究と呼んでいること、またわれわれがその成果と呼んでいること**」は、「根本においてまさに……われわれの努力とその成果ではなく、むしろ**神の言葉自体の運動**」におけるそ

れである、起源的な第一の形態の神言葉自身の出来事の自己運動におけるそれである。

「古代の教会が知識主義（グノーシス）を防衛しつつ、同時に神、キリスト、聖霊の神性の単一性の認識にまで到達した時」、また「宗教改革の時代にただ恵みのみによって救われた罪人として人間理解が戦いつつ勝ち取られた時」、そしてまた「われわれが現代において……神の啓示の偶発性を、換言すれば、具体的ニハ、一方において旧約聖書の啓示の性格を、他方において教会とその使信の独創性を、野蛮人たちに対して弁護し、……自分自身新しく認識しなければならぬ時」、「それらすべてのことは」、起源的な第一の形態の神言葉自身の出来事の自己運動におけるそれである。その時には、「神の言葉が……誤認され、贋造される……時代と状況のただ中において」、「啓示自身を持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた、「人間の信仰と人間が真理に向かって開かれている開放性が登場しているのである」。

そのような訳で、「もしも〔第三の形態の神の言葉である〕教会」が、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である「聖書の権威と自由を剥奪し、聖書の権威と自由を相対化して」、「わがまま勝手に」恣意的独断的に起源的な第一の形態の「神の言葉〔具体的には、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書〕と並んで、神の言葉の上に、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会自身とその伝統、自然、人間の本性と歴史を、……神認識の源泉として考慮し、取り扱うことを……自分に許すならば、神の言葉自身は、教会に対して自分を隠し、教会から身を引く……のである」。また、「もしも教会」が、「ただ単に……預言者と使徒たちの〈人間的側面としての〉人間的言葉そのものだけを」、それ故に「実際には教会と何の関係もない」、教会に対して宣教等について「何も義務づけない」、「遠い、歴史的な法廷だけを聞こうと思うならば、神の言葉自身は沈黙するのである」。しかしながら、「啓示に固有な自己証明能力」を持っている啓示自身は、それ自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の神の言葉自身は、「それでいて……その沈黙を通して語るのである」。また、「もしも教会」において、「聖書がそれ自身の霊、聖霊の導きの代わりに、〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間的な〕何らかの霊の鼓舞に従って、強引に、一面的に、恣意的に解釈されるならば、神の言葉自身は、自分を闇の中に隠してしまうのである」。言い換えれば、人は、それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「聖書を、実際に祈りなしに、換言すれば神の恵みを呼び求めることなしに、読み、〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰として〕理解することはできない」。したがって、「祈りの前提のもとで……人間的な努力および人間的な無能力と直面して、悔改めが真剣な問題となり、実り豊かなものとなる……のである」。教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学における思惟と語りが、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰

な思弁でしかないかということは、神ご自身の決定事項であって、われわれ人間の決定事項ではない」、それ故にそれは、「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈り」の態度〕に対し神が応じて下さる〔「祈りの聞き届け」〕ということに基づいて成立している」。したがって、東京神学大学の実践神学者の小泉健が、人間学的神学者のルドルフ・ボーレンの「神律的相互関係」という概念に依拠して、「聖霊が説教者に言葉を与え、語ることに導く。説教者は聖霊の言葉を伝え、聖霊の言葉に導く」と聖霊や聖霊の言葉を「わがまま勝手に」恣意的独断的に実体化することは、すなわち説教の言葉を全く人間的な説教者の決定事項にしてしまうことは、全くの誤謬・曲解である。「第一に……常に神の言葉自身が優位性を持っている歴史」、「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）に対する認識と自覚が肝要である。第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書の形態の中での〔起源的な第一の形態の〕神の言葉は、確かに……〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会および〔全く人間的な〕世の行動、思惟、語りの対象であるが、それはいつもただ神の言葉があつた優位性を持っていた後で持っていた限り、換言すればこの行動、思惟、語りの本来的な主体であつた後で、あつた限りのことである」。起源的な第一の形態の「神の言葉」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書）は、「常に第一に歴史の主体であり、主辞であり」、それ故にそれは、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会〔すべての成員〕および〔全く人間的な〕世の主体、主辞であり」、それ故にまたそれは、「この限定性の下で、初めて歴史の対象であり」、それ故に第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会〔すべての成員〕および〔全く人間的な〕世にとっての対象である」。

「それらすべてのこと」は、客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」とその「啓示の出来事」の中でのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいた、「〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会および〔全く人間的な〕世の（支配する）初めと終わりが啓示されるようになることとしてのイエス・キリストの甦えりを信じる信仰の内容である」。「それらすべてのこと」は、「教会史および世界史の哲学の言明としては、……語られたり、語られなかつたり、主張されたり、否定されたり、そのいずれもすることができる……ことである」。しかし、その時には、その「言明は、人が現象学的にまたイリアドの歴史あるいはプラトンの対話篇に出て来る記述について……語ることができる」と同じ人間学的水準におけるそれに過ぎないものである。それに対して、われわれは、「あなたがたはわたしの証人となるであろう、また、見よ、わたしはいつもあなたがたと共にいるのであるという約束を肯定し、展開したのである」、「イエス・キリストが甦えられたがゆえに、したがってこの約束がまことであるがゆえに、まことであるところのことを語ったのである」。「確かに、まさにそこからして神の言葉の自由と優位性についてのすべてのことが語られ、聞かれなければ

ばならない」。